Osaka University Knowledge Archive

Title	タイ語を母語とする日本語学習者にみる行為の結果を表す表現の研究 : 実現可能場面における自動詞・他動詞とその可能形
Author(s)	Sae-Lim, Pannee
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55718
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（SAE-LIM PANNEE）	
論文題名	タイ語を母語とする日本語学習者にみる行為の結果を表す表現の研究 ―実現可能場面における自動詞・他動詞とその可能形―

論文内容の要旨

【研究の目的】

日本語教育において、自動詞と他動詞は重要な文法項目の一つとして初級の段階で導入される。しかし、自動詞と他動詞には使い分けがあり、外国人学習者にとって難しい文法項目の一つだと言われている。筆者も含めてタイ語を母語とする日本語学習者が悩まされる使い方の一つが、日常生活でよく遭遇する実現可能場面（実現可能の場合と実現不可能の場合）における行為の結果を表す表現である。例えば、

(1) 黒板の字がなかなか｛ 消えない$_{自}$／消せない$_{他可}$ ｝。
(2) 新しい黒板消しを使ったら、｛ 消えた$_{自}$／消せた$_{他可}$ ｝。
(3) コンタクトがなかなか｛ 入らない$_{自}$／入れられない$_{他可}$ ｝。
(4) 目を大きく開けたら、｛ 入った$_{自}$／入れられた$_{他可}$ ｝。

(1)(2)のような実現可能の場合と実現不可能の場合では、自動詞と他動詞の可能形のいずれかを使用する。しかし、(3)(4)のように、他動詞の可能形より自動詞を使用する方が多くの日本人に自然に感じられる場合もある。実際の場面に遭遇したときには、日本語では場面に応じた表現の使い分けをする必要があると考えられる。

しかし、タイ語では、日本語ほど自動詞・他動詞の概念を意識しないため、日本語の自動詞と他動詞はタイ語を母語とする日本語学習者の混乱を招くと予想される。例えば、上級レベルになっても(5)にみられる自動詞の可能形のような不適切な表現の使用がしばしば見られる。筆者も、(6)のように日常生活のトラブルに遭って、誰かに助けを求めたい時に、日本語で自動詞と他動詞のどちらを使用したらいいのか、可能形にすべきかどうか、迷った末に誤用してしまうことがある。

(5) *かばんに荷物を入れようとしたけど、なかなか 入れない$_{自可}$。
(6) ロッカーのキーが｛ 回らない$_{自}$／回せない$_{他可}$／*回れない$_{自可}$ ｝。

このように、タイ語を母語とする日本語学習者にとって、自動詞と他動詞を適切に使い分けることは困難なことである。しかし、このような問題について、タイ語母語話者、あるいはタイ語を母語とする日本語学習者を対象とした研究は、管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では、日常生活で遭遇する実現可能場面における、行為の結果を表現する際の、タイ語を母語とする日本語学習者の自動詞と他動詞の使用実態および使用理由を調査することを目的とする。調査結果の分析・考察を行うために、本研究では日本語とタイ語両言語における行為の結果を表す表現の特徴や異同も明確にし、以下の4点を明らかにすることを目的とする。

① 日本語母語話者が日本語でどのような表現を使用するのか。
② タイ語母語話者がタイ語でどのような表現を使用するのか。
③ タイ語を母語とする日本語学習者が日本語でどのような表現を使用するのか。
　どんな誤用を犯すのか。その理由は何か。
④ タイ語を母語とする日本語学習者にとって何が難しいのか。難しさの理由は何か。
　どのように指導すればいいのか。

【研究方法】

これまで、行為の結果を表す表現について、日本語母語話者および外国人日本語学習者を対象とした研究がなされてきた。しかし、いずれの研究においても調査方法や分析の仕方に関する問題があり、適切な調査がなされているとは言えない。

本研究では、行為の結果を表す表現に関して、これまでの先行研究の問題点を踏まえた上で、日常生活で頻繁に遭遇すると思われる実現可能場面を設定し、日本母語話者（JNS、50人）が用いる日本語、タイ語母語話者（TNS、50人）が用いるタイ語、そしてタイ語を母語とする日本語学習者（TJL、50人）が用いる日本語の使用実態を文完成テスト（実現不可能と実現可能の各10場面、全20問）により調査した。また、各調査で調査協力者が使用した表現の選択理由などを調査するためにフォローアップインタビューを実施した。

また、得られた調査結果を、日本語教育現場での実現可能場面における行為の結果を表す表現の指導に活かすために、タイ語を母語とする日本語学習者に対する指導方法や現状に対する改善点などを提案した。

【研究結果】

前述した3つの調査の結果を以下にまとめる。

1. 日本語母語話者にみる日本語の行為の結果を表す表現

JNSには、日本語で行為の結果を表現する際に、自動詞（開かない―開いた など）、他動詞の可能形（開けられない―開けられた など）を用いた回答の二通りの表現が見られた。実現可能場面全体を見ても、場面別に見ても、実現したか否かに関わらず、自動詞の使用が80％以上と他動詞の可能形より高い傾向にある。また、JNS別に見た結果、50人中49人（98％）が他動詞の可能形より自動詞をより多く使用している。それぞれの動詞を選択した理由には、Ⅰグループ動詞（五段活用の動詞）とⅡグループ動詞（下一段活用の動詞）の可能形の形態の違いや、結果の状態や物の変化に注目するという日本語母語話者の視点の置き方の特徴が関係していると考えられる。

これらの結果から、実現可能場面における行為の結果を表す際に、JNSは行為を受けた結果の状態や物の変化に注目しており、日本語では実現可能場面における行為の結果を表す表現として自動詞が使用される傾向にあることが明らかになった。

2. タイ語母語話者にみるタイ語の行為の結果を表す表現

タイ語で行為の結果を表現する際には、行為を表す前項動詞（動詞$_1$）と結果や可能を表す結果補語（ʔɔ̀ɔk 出る、khâw 入る など）、可能補語（dây 得る）などの後項動詞（動詞$_2$）を組み合わせた動詞連続構文（動詞$_1$＋ 動詞$_2$）を用いるため、TNSには、複数の表現による回答が見られた。

行為を表す動詞に後続する結果の状態を表す結果補語を用いた表現を結果表現、可能を表す可能補語を用いた表現を可能表現とし、この二通りの表現に分けてタイ語の使用実態を見た。その結果、実現可能場面全体を見ると、結果表現の使用（59.6％）が可能表現（40.4％）よりやや高い傾向にあるが、場面によっては結果表現の回答が高い場合もあれば低い場合もあるため、場面別で傾向が異なることが分かった。

また、TNS別に見た結果、TNSによって結果表現を多く使用する人もいれば、可能表現を多く使用する人もいるため、TNS間で表現使用に差があると言える。それぞれの動詞を選択した理由には、TNSそれぞれがどのように事態を叙述しようと考えているかが関係していると考えられる。

これらの結果から、実現可能場面における行為の結果を表す際に、TNSは行為の結果や物が変化した状態を具体的に表したい場合、結果補語といった結果表現で表す。それに対し、人の能力、可能、その事態が実現したことを叙述したい場合、可能表現を使用する。このように、TNSそれぞれが、どのように事態を叙述したいと思うかによって、使用する表現も変わってくることが明らかになった。

3. 日本語とタイ語の行為の結果を表す表現の対照

JNS と TNS の両者の実現可能場面における行為の結果を表す表現の使用傾向や使用理由を見たところ、両言語それぞれの表現の特徴や使用傾向、使用理由などが異なるということが明らかになった。

JNS はどの場面においても動作を受けた物の変化や結果などに注目しており、自動詞を使用するというパターンが確立している。それに対し、TNS は、TNS 自身がその動詞や場面に普段遭遇する頻度が高いか否か、または、どのように事態を叙述したいと思うかが表現の使用に影響する。そのため、場面および TNS によって使用傾向が異なっており、実現可能場面における行為の結果を表す表現を日本語のようにパターン化できない。

4. タイ語を母語とする日本語学習者にみる日本語の行為の結果を表す表現

TJLのうち、日本語の授業で行為の結果を表す表現を教わったのは8人（既習者）、教わっていないのは42人（未習者）であり、既習者の人数は未習者に比べて圧倒的に少ない。

実現可能場面全体の回答を見ると、既習者の表現の使用はJNSと近似しており、自動詞の使用が80.6%と高い。それに対し、未習者は自動詞と他動詞の可能形の使用がそれぞれ33.7%、32.9%と、ほぼ同じ傾向を示している。また、自動詞、他動詞の可能形以外、他動詞、自動詞の可能形、自動詞のテイル形、他動詞のテイル形、他動詞の受身形などの様々な形式が未習者に見られる。とりわけ、誤用の中で他動詞および自動詞の可能形の誤用が他の形式より多い。また、TJLに対して行ったフォローアップインタビューの結果から、TJLが使用する表現の選択理由は、物と人どちらに視点を置くかということ、母語の影響、TJL自身の経験（学習経験や日本語母語話者との接触経験など）の三つが大きく関係していることが分かった。

さらに、場面別、TJL別に見ると、既習者の回答は場面やTJLによって若干差異はあるものの、いずれの場面においても自動詞の回答が多かった。一方、未習者の場合、自動詞の使用が多い場面もあれば他動詞の可能形の使用が多い場面もあり、多様な表現を使用していることが分かった。

これらの結果から、既習者は実現可能場面における行為の結果を表す表現を明示的な形で学習したことにより、JNSと同じ観点で事態を捉えているのに対し、未習者はTNSと同じく、さまざまな観点で事態を捉えており、それが多様な言語表現の選択につながったものと考えられる。また、TJLの正用・誤用の回答に影響する主な要因として、学習環境や学習内容が大きく関わるということも明らかになった。実際の日本語使用の場面に関連づけて自動詞と他動詞の概念の指導を受けた既習者は、行為の結果を表す際に、日本語母語話者が用いる表現と同じような表現を選択できるのである。

5. 日本語教育現場への提案

日本語教育現場でタイ語を母語とする日本語学習者に対して、行為の結果を表す表現を指導する際の文法上の注意事項として、タイ語は日本語ほど自動詞・他動詞の概念を意識しないこと、行為の結果の表し方や事態の捉え方が異なることが挙げられる。したがって、学習者に日本語の自動詞・他動詞の概念を理解させ、可能形の脱落や過剰使用に注意を払いながら、各表現の用法について指導することが重要である。

しかし、タイでよく使われている教科書や教材に載っている自動詞・他動詞の導入の課は、自動詞と他動詞の語彙や意味、助詞だけを重視することが多く、実際の場面に応じた自動詞と他動詞の使い分けに関する解説がなされていない。また、可能形が導入される課では、動詞の活用の規則を中心に導入し、主体の有情性や意志性などの使用条件に関する説明や行為の結果を表す表現（実現可能文）に関する説明がどの教科書にも見られない。そのため、教師は学習者の理解を促し、自動詞と他動詞の概念を意識するように働きかけるために、本教材以外に補足資料を用意し、指導内容を工夫すべきである。

したがって、日本語教育現場では、まず教師自身が行為の結果を表す表現が重要な指導項目であると認識し、その上で、日本語とタイ語の両言語間の異同を踏まえ、実際の日本語使用に即した場面を取り上げながら説明し、学習者が十分理解できるように指導することが重要である。

本研究では、調査結果の分析・考察を日本語教育における行為の結果を表す表現の学習・指導に役立てるため、TJLの実現可能場面における行為の結果を表す表現の使用実態や問題点を明らかにした。本論文が今後の日本語研究と日本語教育研究の発展に資することを切に願うものである。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　SAE-LIM PANNEE　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	筒井　佐代
	副 査	教授	鈴木　睦
	副 査	教授	宮本　マラシー
	副 査	教授	真嶋　潤子
	副 査	教授	堀川　智也

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、「黒板の字がなかなか[消えない／消せない]」「新しい黒板消しを使ったら[消えた／消せた]」のような、実現可能場面における行為の結果を表す表現を研究テーマとし、日本語とタイ語でそれぞれこのような場面においてどのような表現が用いられるのか、またタイ語を母語とする日本語学習者が日本語の実現可能場面においてどのような表現を使用し、どのような誤用を犯すのか、またその誤用の要因は何であるのかを明らかにし、タイ語を母語とする日本語学習者への指導方法を提案することを目指した研究である。実現可能場面の行為の結果を表す表現の研究は、日本語母語話者を対象とした研究はあるものの、網羅的、体系的であるとは言えず、日本語学習者を対象とする研究も不十分であり、タイ語を母語とする日本語学習者に関する研究はほとんどないに等しい。したがって、本研究はこの分野での先駆的な研究であると言える。

本論文では、日本語母語話者50名、タイ語母語話者50名、タイ語を母語とする日本語学習者50名に対して文完成テスト20問ずつを実施し、その結果を調査協力者へのフォローアップインタビューと併せて考察することによって、実現可能場面における日本語母語話者、タイ語母語話者、タイ語を母語とする日本語学習者それぞれの表現の使用傾向と、表現選択の理由を明らかにしている。大量のデータを扱い、設問ごとの傾向と調査協力者ごとの傾向、学習者については既習者と未習者による傾向など、複数の観点から詳細に分析していること、さらに個々の調査協力者のインタビューから得られた意見を踏まえて議論していることなど、データを十分に活用し、様々な角度から考察して結論を導き出すという手法は手堅く、また文章も大変読みやすく、図表の提示も的確であり、説得力のある論文となっている。分析から、日本語母語話者は、行為を受けた結果の状態やものの変化に注目して自動詞を選択する傾向でほぼ統一されるのに対し、タイ語母語話者は行為の結果やものの変化を表したければ結果表現で、人の能力や可能、事態の実現を叙述したければ可能表現を使用するなど、どのように事態を叙述したいかによって表現が異なるということが明らかにされているが、このような両言語の違いがタイ語を母語とする日本語学習者の誤用の背景にあるという指摘は、日本語母語話者にはなかなか気づくことのできない点であり、文法教育の見直しを迫る大変有意義な議論であると言える。

本博士論文では、これまでの日本語教育の教材の中で自動詞・他動詞の教育が不十分であること、また可能形の導入において自動詞・他動詞との関連づけがなされていないことを、教材分析から指摘しており、日本語教育現場への提案として、タイ語では日本語ほど自動詞・他動詞の概念を意識しないため、日本語の自動詞・他動詞の概念をまず理解させる必要があること、その上で実際の場面に応じた自動詞・他動詞の使い分けを指導する必要があること、可能形の導入の際には実現可能場面における他動詞の可能形について扱う必要があることが提言されている。日本語教育において自動詞・他動詞の教育はなおざりにされてきていると言わざるを得ないが、今後、自動詞・他動詞を整理し直し、学習者の運用につながる形で指導することに向けて、本論文はその一部となる一つの有効な解決策を提案したという点で、日本語教育学に貢献する優れた研究として高く評価できる。

以上のことより、博士論文審査委員一同は、本博士論文の成績を合格と判断するに至った。